

## 【書評】

山出裕子著『ケベックの女性文学—ジェンダー・エクリチュール・エスニシテイ』

彩流社、2009年

YAMADE Yuko, *Littérature québécoise au féminin : Femme, écriture, ethnicité*, Sairyu-sha, 2009.

堤 稔子

TSUTSUMI Toshiko

2 言語・多文化主義のカナダには文学も英語と仏語の 2 種類あり、カナダ文学事典の決定版『オックスフォード・コンパニオン』(*The Oxford Companion to Canadian Literature*、初版 1983、第 2 版 1997) は詩・小説等ジャンル別に英語と仏語の項目を設け、両言語の作家を満遍なく網羅している。1930 年代の発足当時は英語作品のみを対象としていたカナダ総督文学賞も、1959 年代末から英語・仏語それぞれジャンル別に授与されるに至った。ただし州別に見ると、公用語を英仏両語としているのはニュー・ブランズウィック州のみで、ケベック州は仏語のみ、その他の州は英語。文学も英語文学がほぼ全国に渡っているのに対し、仏語文学の大半はケベック州に集中していて、「カナダの仏語文学」すなわち「ケベック文学」の感さえある。しかし歴史的に見ると、ケベックの文化的中心地モントリオールはかつて、英語文化の一大拠点でもあった。現代カナダ詩の元祖 A. J. M. スミス、F. R. スコットらマギル大学に連なるモントリオール・グループ、カナダのユダヤ系文学の大御所、詩人 A. M. クラインや小説家モーデカイ・リッチラー、『二つの孤独』で一世を風靡したヒュー・マクレナン……。英系と仏系はそれぞれ独自の立場を守りつつ、共存関係にあった。だがケベック・ナショナリズムの高まり、1974 年の「公用語法」、1977 年の「フランス語憲章」制定を経て、英語系は衰退する。上記『コンパニオン』は「ケベックにおける英語文学」の項目にこの衰退を認めながら、次世代に望みを託してはいるが、代わって台頭するのが、仏語政策に支えられた仏系以外の民族集団、特に新移民。こうした複雑な背景を持つケベック州の文学と文化を女性作家中心に女性学の立場から論じたのが、全 6 章から成る本書である。以下、章ごとに

内容を概観しよう。

**第1章 女性文学成立の背景。**フランスによるカナダの植民からイギリス自治領としての独立（1869年は誤植で正しくは1867年）、そして「建国の祖」でありながら長年英系支配の下に少数派の地位に甘んじてきた仏系からの圧力が発端となってカナダが2言語・多文化主義国家となる過程を概観し、次にその推進力ともなった1960年代の「静かな革命」——カトリック教会の支配から脱却し近代化を促進——を「ケベック・ナショナリズム」および「フェミニズム」と関連づける。他州より20年余遅れたとはいえ、1940年（1944年は誤植）に参政権（州選挙投票権）を獲得し、社会進出の基盤を整え始めたケベック女性の運動は、上記「革命」を経て1970年以降、目覚ましい盛り上がりを見せ、「フェミニスト文学」が注目を集める。この展開に果たした女性誌の役割が、特に「新しい女性」を標榜する『シャトレーヌ』や急進的な『頑固な女たち』を通して論じられる。

**第2章 女性文学の起源。**ルイ・エモンの『マリア・シャブドレーヌ』の主人公などに見られる、伝統に縛られた従順な旧来型の女性像を示した後、「静かな革命」以前、すでに新しい方向性を示した3人の女性作家の作品を紹介する。主人公フロランチヌとその家族を中心に、モンリオールの仏系貧民の姿を赤裸々に描いてケベックの文学界にセンセーションを巻き起こしたガブリエル・ロワの『かりそめの幸福』（1945）。主人公カトリーヌの幼少期、結婚生活、離婚と「新しい女性」を目指す姿を通して、自立に至る彼女の半生を描くアンヌ・エペールの『閉ざされた部屋』（1958）。それぞれ1909年、1916年生まれこの2人に対し、1939年生まれのマリ＝クレール・ブレの17歳の作品『美しき獣』（1959）に、著者は「フェミニスト文学の萌芽」を見る。

**第3章 フェミニズムと自伝文学。**フェミニズム運動が世界的に盛り上がる中で、ケベックのフェミニスト文学は特にフランスのフェミニズム運動の特徴、書くこと、語ることを通して解放を求める「女性のエクリチュール」と、急進的なアメリカの「ラディカル・フェミニズム」の影響を受け、「肥沃なトライアングル（三角州地帯）」に生まれたという。女性たちが従来のジャンルの枠に捕われず、自由な表現手段を模索して、女性独自の「私的な」ことを「政治的」にしようと試み、女性同士の関係性を強調して女性のアイデンティティを形成していく過程が、ニコル・プロッサールの『レズビアン

日記』、フランス・テオレの『記憶のための日記』、マドレーヌ・ウレット＝ミカルスカの『語りたいた誘惑』等に代表される自伝的作品を通して示される。こうした女性作家たちは「ケベック文学の伝統を根底から揺るがし、ケベックの文学界を変える」影響力を残した。

**第4章 複数民族性と英系モンリオール文学。**多文化主義がカナダにおけるフランス文化の独自性を見えにくくするという危惧からケベックが独自に唱える「複数民族性」を紹介し、この枠組みの中で「忘れられた」もしくは「無視されている」モンリオールの英語文学を、メイヴィス・ギャラントとロビン・サラの例により論じる。このうち1922年生まれのギャラントはモンリオールに生まれるが、複雑な家庭背景から北米各地を転々として育ち、作家としてのデビューは生まれ故郷で果たすものの、1950年以來パリに永住、短編をニューヨークやトロントで出版している英語カナダ文学の国外居住作家。本章が論じる「仏系多数派の中の英系少数派」としての緊張感よりも、祖国喪失者としての意識の方が彼女の特徴と言えるのではないか。一方、(ユダヤ系の)英系カナダ人を両親にニューヨークに生まれモンリオールで育ったサラの作品『ナイス・ガゼボ』他は、英語作品に仏語を翻訳なしで織り交ぜるなど、英仏文化が共存する好例として紹介される。

**第5章 ケベック移民女性と文学I。**次章と共に、近年増加しているアラブ系とアジア系の女性作家に焦点を当て、ケベックの文化を吸収しながら移民としての経験を語る「移民のエクリチュール」を論じる。本章が取り上げるのは3人のアラブ系作家。アンヌ＝マリ・アロンゾは1951年エジプト生まれ、ケベックに移民した1963年、交通事故に遭遇、半身不随に加え、母国で身につけた仏語とケベックの仏語との言語上の違和感から、二重の疎外感に悩む。自伝的詩集『身体表現』他を残し、2005年没。ナディーーン・ルタイフは1961年エジプト生まれのレバノン人で1980年ケベックに移住、アラブ語を母語としながらフランス語で書くという不安定な立場から作品を紡ぎ出す。2つの文化の間に自分の場所を見出し、それをアイデンティティの拠り所としているという。最も多くのページが割かれているレジーヌ・ロバンは1939年パリ生まれのユダヤ系、パリで教育を受け、1977年モンリオールに移住した作家で社会学者でもある。フランス語で書きながら、イディッシュを母語とする彼女のアイデンティティ意識は常に部外者で、「ケベック文化の外側にとどまり、文化の間に多様性と創造性をもった空間を見出す」のが、他の移民女性作家とも共通する重要な特徴であるという。その多様性

と創造性が小説『ラ・ケベコワット』や自伝的フィクション『石ころたちの途方も無い疲れ』を通して詳述される。

**第6章 ケベック移民女性と文学Ⅱ。**中国系イン・チェンと日系のアキ・シマザキを取り上げる。イン・チェンは1961年上海生まれ、大学卒業後翻訳家として活躍し、1989年マギル大学に留学、修士論文に加筆修正した第1作『水の思い出』(1992)を皮切りに、モンリオールで精力的な創作活動を続けている。著者の分身である主人公の中国人女性とその祖母リ・フェイの語りにより、纏足に象徴される中国社会の女性差別を批判する『水の思い出』。母国で語る機会を持たなかった移民の記憶がケベックで再生され、ケベックの女性文学で「文化批判」という新たな役割を得る。第2作『中国人の手紙』では中国に残る女性とケベックの移民として生きる女性とが、著者の体験に照らして比較される。日系のシマザキは1954年岐阜県生まれ、1981年カナダに移住し、バンクーバー、トロントを経て1991年以来モンリオールに在住、新たに修得した仏語で創作活動を行ない、処女作『ツバキ』(1999)に始まる五部作の完結作『ホタル』(2005)では総督文学賞受賞。外国人の好む異国情緒的「オリエンタリズム」とは一線を画し、関東大震災と第2次大戦下の原爆投下を背景に、人間の裏切りや不信感によって崩壊していく家族を描いた『ツバキ』。在日朝鮮人問題を扱った第3作『ツバメ』。フェミニズムの要素は彼女にはないが、ケベックの移民作家として日本社会に鋭い文化批判の目を向ける点、イン・チェンと共通する。

以上、章ごとにまとめた本書を総括すると、3章までの前半ではジェンダー・エクリチュールを軸にケベックにおけるフェミニズム文学の発展をたどり、後半ではエスニシティの視点から英系モンリオール文学、次いで移民文学を論じることにより、ケベックの社会や文化を考察している。「カールトン大学に編入学して英系モンリオール文学を学び始め、モンリオール大学の博士課程で比較文学を学び、コンコルディア大学のポスドック研究でアジア系ケベック文学を研究するまでの、ケベックの文学、女性学、歴史学に関する研究の成果」と著者みずから位置づける、膨大かつ野心的な企画である。

ケベックに関する研究は近年、日本でも次第に進み、文学でも小畑精和著『ケベック文学研究』(2003)、真田桂子著『トランスカルチュラルリズムと移動文学』(2006)の先行研究があるが、「女性文学」の切り口からジェンダー、

エクリチュール、エスニシティというキーワードを通してケベックの文化・文学を探った本書は斬新な試みである。ケベックのナショナリズムに大きな役割を果たした文学にフェミニズム文学の果たした役割は大きく、その分析はケベック社会全体を知る上でも不可欠。ただ、エスニシティに関しては「複数民族性」や「移民文学」と女性文学との関わりの必然性、あるいは英系モントリオール作家の位置づけ等には、若干問題が残るように思われる。「複数民族性」を論じる章にイタリア系、南米系、先住民等への言及がなく、英系のみが取り上げられているのも不自然な印象を与える。とは言え、未知の分野を切り開いてそこから見えてくる問題点に光を当て、後続研究に<sup>しるべ</sup>標を与えた功績は大きく、得がたい好著であるとの結論に変わりはない。

(つつみ としこ 桜美林大学名誉教授)